



# カタカムナウタヒ

## 13～16首

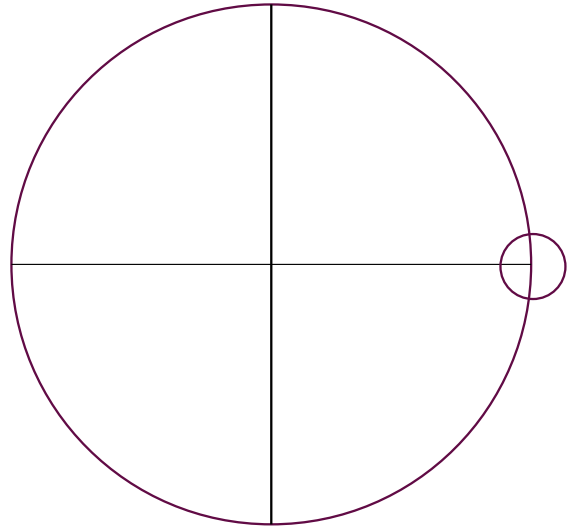
---

相似象学会誌12号

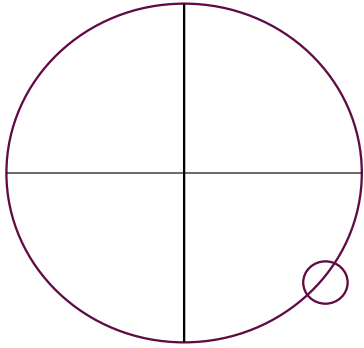




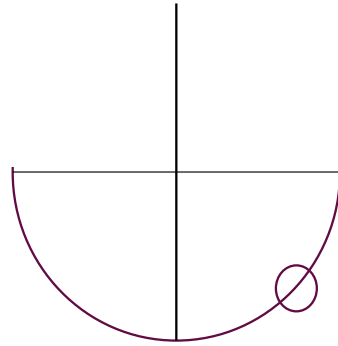




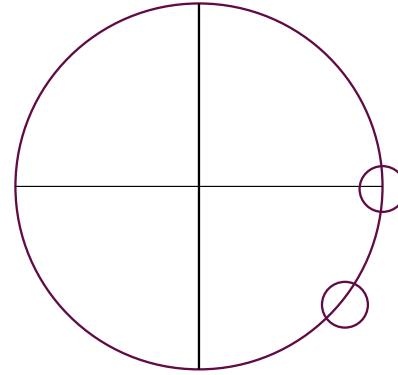
アワ  
ヒヒキ  
アカ



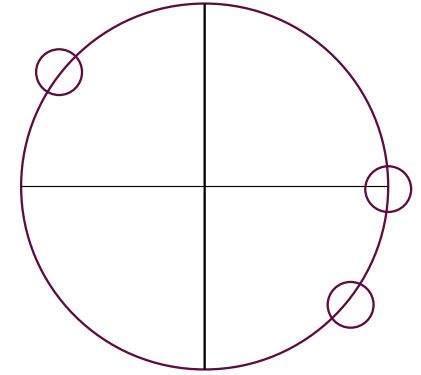
サヌキ  
ヤタ



ヤ

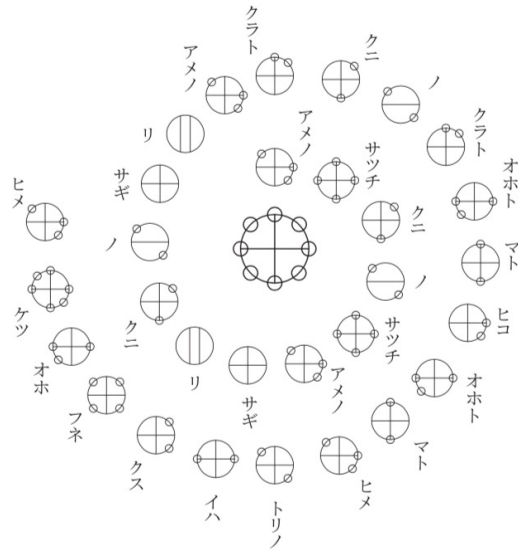


カヤヌ  
ヒコ、コト  
ヤコト  
コトサトリ  
サヌキアワ



ヤタノカ  
ヒコヒメ、コメ  
アメ、アメノ  
ヒワケ  
タケヒ

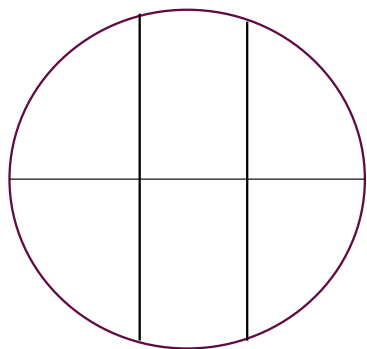
# 第十六首



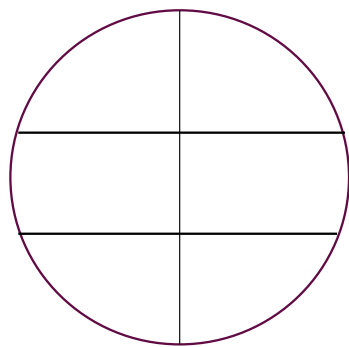
## 概要

「タ」した「カ」は「アワナギ アワナミ ツラナギナミ」となり、アメに変遷（ノ）して「アメノサツチ」になり、クニに変遷（ノ）して「クニノサツチ」となり、また、アメに変遷して「アメノサキリ」になり、クニに変遷して「クニノサキリ」となり、アメに変遷して「アメノクラト」となり、クニに変遷して「クニノクラト」となる。六方環境（オ）の親和（ホ）の重合（ト）により「マ」に統合（ト）するチカラを「ヒメ」で 統合（ト）し分離（リ）して変遷（ノ）し、「イ」（現象粒子の最小単位）の正反（ハ）の自由な（ク）進行（ス）の二つの（フ）根（ネ）となり、六方環境（オ）親和（ホ）の変化性（ケ）が個々（ツ）に「ヒメ」られているのである。

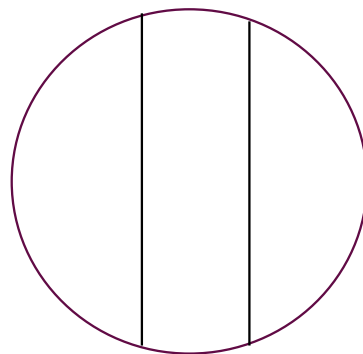
第十四首で「アキツ ヒコ イモ ハヤ アキツ ヒメ」といって、現象に発生した「ヒコ」には、必ず現象を生むチカラが「ヒメ」られているという物理を示し、第十五首では、そのヒメているものが「カタ」したアワのナギであることを示し、それが「ミクマリ」となって、多様な統計的な粒子（シナツヒコ）となり自由な変遷を続けて現象の「オハヤマツミ」となる。そしてその際、元々のカタしたアワのチカラは潜象のまま（ヌツチ）「カヤヌ」としてヒメられている。このようにカからタしたア「アワ ナギ」が多様な（クヒサ）自由な変遷を続けて（ククノチ）シナツヒコ（電子とよばれるイハや原子分子とよばれるハコクニ）を生産するのは、現象のヒコに、現象の形態（オホヤマ）をカタチつくる個々粒子（ツミ）に、ヌツチのカヤヌがヒメられているからであるという「カヤヌ」のナリを第十六首で述べている。



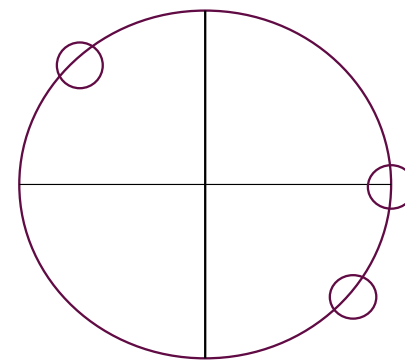
サ



キ



リ



アメ、アメノ